ユースワークの価値を考える

～若者へのインタビュー調査から～

京都市ユースサービス協会　水野篤夫

このシリーズも21号から始まって10回目。今回で最終回となります。そこで、ちょうど報告書として仕上がった、ユースワークの価値を明らかにしようとする調査報告書(*)から、特に大事と思われる点を紹介して、まとめとしたいと思います。今回の調査は、青少年活動センター(以下センター)を利用したり事業に関わった若者11人へのインタビューという方法を採りました。それゆえ、一定の偏りがあるともいえますが、豊かな語りを通して、ユースワークというものが持つ可能性を明らかにすることが出来たと思います。

1. 若者はどのようにユースサービスを利用しているのか

センターと若者の出会いは、「友だちに誘われて行った」「中学生になったら使えると知っていた」「ネットで自習できるところを検索して」などさまざまですが、最初は誰かといっしょに訪れることでハードルを下げている人が多いことも分かりました。「居心地が良さそうだな」と感じてくれた若者も多いのですが、対応する職員＝ユースワーカー(以下ワーカー)が創り出す雰囲気もそこには反映されていました。

もともと俺、最初引っ越したときに、休みの日とか仕事終わったあと暇なとき、ひたすらゲームしてた(笑)。一日がパソコンの前で終わってしまった……！

学校以外のこと、何かしてみたいなと思っていて。で、ちょっと引っかかったっていうか、気になるなと思って。

異文化理解プログラムを考える!

前者の若者はトレーニングジムを利用しにセンターに来てくれましたし、後者の若者は、センターのボランティア活動に興味を持って参加してくれました。こんな風に入り口や動機はいろいろなのですが、利用する内にセンターの事業に誘われたり、時間つぶしにロビーにいる時に、留学生といっしょにゲームをするようになったりと、さまざまに利用方法が広がっていく人もいました。調査の分析からは、センターの特徴を、利用目的の〝曖昧さ〟に見ています。最初は何か目的を持ってやってきても、さまざまな利用や参加のあり方が広がっていく可能性がそこにはあり、それ自体がセンターの大きな特徴だと分かりました(原、4章)。

2. ユースワークにおける〈場〉の価値

センターは、若者が活動するための場所を提供しています。集まって話したい人は会議室を借りるし、ダンスやスポーツをしたい人はスタジオや体育室を予約して使っていきます。インタビューからも多様な施設・設備を、無料で、かつ簡易な手続き・利用しやすい時間帯で使えるといった、使い勝手のいい場所としてセンターが若者たちに認識されていることが分かります。また、若者の語りには「良い空間だと思った」「居心地が良かった」という表現が数多くあり、センターが単なる場所というより、何かの相互作用の働く〈場〉として捉えられるのではないか、と調査では分析しました。若者だけで使えるといった、自分たちでコントロール出来る空間であること、多様な他者と出会う機会があること、信頼できるワーカーの居るところ、というセンターの特徴が発見されました(勝部・原、5章)。

3. ユースワーカーという存在

センターのワーカーは、施設を管理し、若者の活動を手助けし、人をつなぐ役割を果たすのですが、どんな風に働いているのか、インタビューを通していろいろな姿が見えてきました。例えば、「印象に残っているワーカーは誰ですか」という問いについて、「ノリのよい人」と「話やすい人」という二つの返答がありました。

清掃ボランティア

ちょっとのノリで言っても全然やってくれるという……なんか普通に「腕相撲しようぜ？」「いいよ」って感じ。

すごい話やすい人、年上なのに友だちみたいな感じ。

友だちでもない先生でもない、職場の人でもない話を聞いてくれる人。

そして、次の語りにはワーカーの存在をとてもよく見ていてくれる若者の姿があって、励まされます。ワーカーが10代の若者に「お前」とか言ってキレられても、怒ってしまわず対応しているのを見ての語りです。

そもそもセンターは、うーん、人を否定しない場所ってイメージがあって、その人がその人のまま大きくなっていくのを望んでいるような感じがあるような気がする。

そうなんです。これがワーカーが大事にしているスタンスなのです。人を否定しない二方的に評価しないと思ってくれる〈場〉づくりをしようとしている様子を、若者は端で見ていて感じ取ってくれているのです(横江、6章)。

最初ちっちゃい世界にいた自分が外の世界を見たような……(略)……学校の友達だけで人間関係が終わって、先生と、親と、バイト先のちょっとの人と。……(略)……〈でもセンターには〉いろんな大学からいろんな事勉強してるいろんなタイプの、個性のある人がいてたので、うーん。その人達がすごい面白かった。

ロビーでの留学生との出会いをきっかけに国際交流事業に参加するようになった若者はこんなことを言っています。

留学生だと結構価値観が違うんで。この人全然違うんやって、じゃぁいいやってよけるんじゃなくて、価値観の違う人とそういう人という意識をもちながら接していたら、他の人が出てきたときに、結構ああ広がったみたいな感じ。

4. 若者の変容・成長とユースワークの関係

若者は子どもから成人の狭間にあって、大きな変化を迫られる存在です。この変化の時期に、どのような人と出会い、どんな経験をしていくのかが、その後の人生にも大きな影響があると言われます。では、ユースワークは若者の成長や変容にどんな影響を与えるのでしょうか。若者は人との関わり方を知って、関わりのスキルを得ていき、同時に他者を受容し、ひいては自己受容につなげていくことが出来る、というのが調査での仮説でしたが、次のような語りには、そうした機会をセンターで若者が得ていた姿が端的に現されています(石山、8章)。

こうした他者との出会いというのが、センターの提供する一つの価値ですが、そこにおけるユースワークの特徴は、若者が「自ら選ぶことが出来る」という点にあります。出会いも参加も、ワーカーとやりとりすることも、若者が受け容れるかどうかを決めることが出来るのです。たださらにいえば、選べるだけでなく、選ぶのも選ばないのも容認する〝曖昧さ〟を持った〈場〉であることに意味があります。そして、〝曖昧さ〟を認めると同時に、人を排除したり否定したりしない空間をワーカーが作っていく内に、いつの間にか影響しあう関係、つまり若者も影響を与えるひとりになっていくような〈場〉を作っていくことが、ユースワークの中核となる価値なのではないか？　というのが、この調査の見出した点です。

(*)『若者の成長におけるユースワークの価値～京都市青少年活動センター利用者インタビューから～』(2017年12月発行、執筆・編集：原未来、石山裕菜、松村幸裕子、勝部皓、水野篤夫、横江美佐子、久住祐香)